

〈縄文楽検定テキスト〉

縄文文化と火焰土器



2008

信濃川火焰街道連携協議会

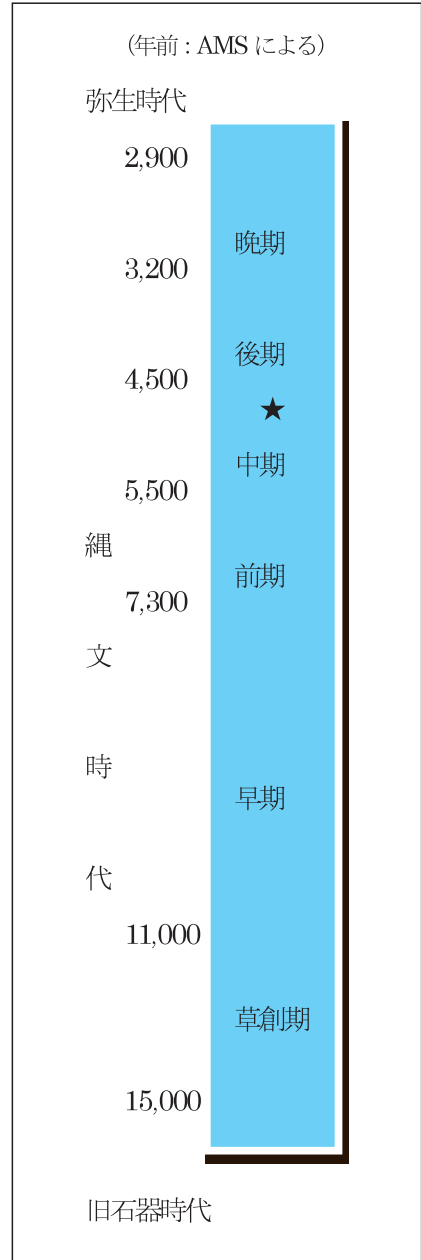
I 信濃川流域の縄文文化

① 縄文時代の信濃川流域の遺跡

縄文文化は、狩猟採集を中心とした文化で、1万年間もの長い間つづきました。この1万年もの長い悠久の時間を、考古学の世界では古いほうから草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6時期に大別します（第1図）。

1万年間以上もつづいた縄文文化は、時として地球規模の気候変動を経験しました。特に、草創期後半は、短期間のうちに極寒冷期と温暖期が交互に揺り戻すヤンガードリアス期と呼ばれる気候変動期でした。前期前葉から中葉に掛けては、リトリナⅡ期に対比される縄文海進が確認されます。この縄文海進は、千葉県館山付近の海辺に珊瑚が成育する環境で、現在の奄美大島付近の気候であったこととなります。

このような気候変動から生じる自然環境を巧みに利用し、共生してきたのが縄文文化なのです。その縄文文化は高度な狩猟と採集を基盤に、広域的な情報伝達網が整備されていたことが、近年の調査で判明してきています。また、木材や植物繊維、樹皮を操り、加工技術や編み技術で、土器や石器以外の多くの道具を作り出していました。

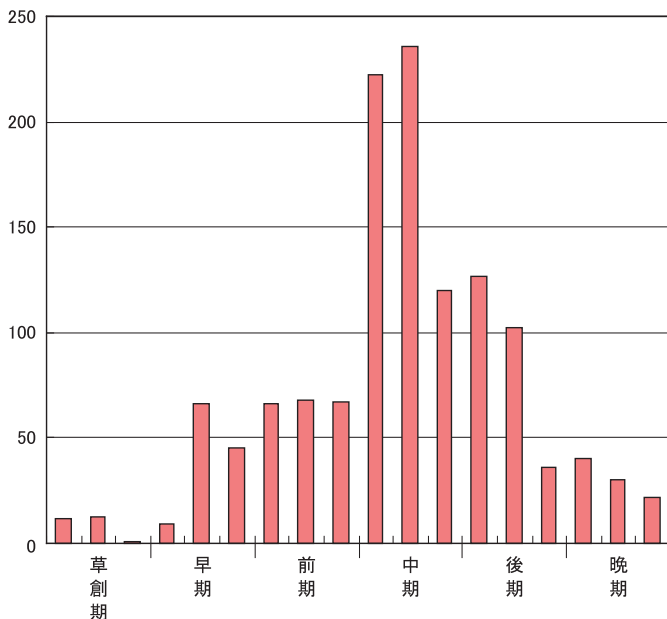


第1図 縄文時期区分

さらに、抜歯風習や潜水作業の専門化などを出土人骨から知ることができます。また、土偶から刺青風習の可能性が示唆され、出土した滑車形耳飾などから、耳たぶ穿孔に伴う耳飾装着風習の存在など、精神文化に裏打ちされた多彩な行動の存在が想定されています。

信濃川流域（長岡市・小千谷市・川口町・十日町市・津南町）に分布する縄文遺跡を集計し、時期別に増減の様子をグラフ化しました（第2図）。

草創期は極めて遺跡数が少ない中で、草創期後葉で激減します。早期前葉も少なく、早期中葉から急激に遺跡が急増し、前期後葉まではほぼ安定的に遺跡数は推移します。火焰型土器が生れ展開する中期前葉～中葉は劇的に遺跡の数が増加します。それ以降、中期後葉～後期中葉、後期後葉～晩期後葉へと段階的に遺跡数が激減する傾向がわかります。この遺跡の変動は、非等質な時期幅（第1図）を背景に自然環境と社会的環境が複雑に関わりあった現象と理解されます。しかし、今後総合的な検討が必要です。



第2図 信濃川沿岸に分布する縄文遺跡の時期別増減
信濃川流域（長岡市・小千谷市・川口町・十日町市・津南町）

② 信濃川流域の火炎土器文化

火焰型土器が造られた縄文時代中期（約5,500年前）は、前期の温暖期に比べやや冷涼化し、ほぼ現在の気候と同じと考えられています。したがって、信濃川流域は、昭和30年代程度の降雪があったと推測されます。

火焰型土器が分布する信濃川流域では、保有した土器組成の1割程度が火焰型土器や王冠型土器であり、他に東北系の大木8a・8b式土器、北陸系の上山田・天神山式土器、北信系の焼町式土器などの遠隔地から運び込まれた土器群とそれを模倣した土器群、さらにはそれらが融合した折衷型式の土器群など多様な土器群が約5割を占め、残りの4割が斜縄文などを施した粗製土器です。

この土器組成から広域な地域間交流が頻繁に行われていた実態が窺われます。

その地域間交流を背景に、ヒスイ製や琥珀製の装身具、蛇紋岩製の磨製石斧、黒曜石や珪質頁岩などの良質な石器石材、接着剤として利用した天然アスファルトなどが信濃川流域に点在したムラに運び込まれています。

この火炎土器文化は、火焰型土器や王冠型土器で表象されますが、そのほかにも、彫刻を施す石棒や石皿、土偶



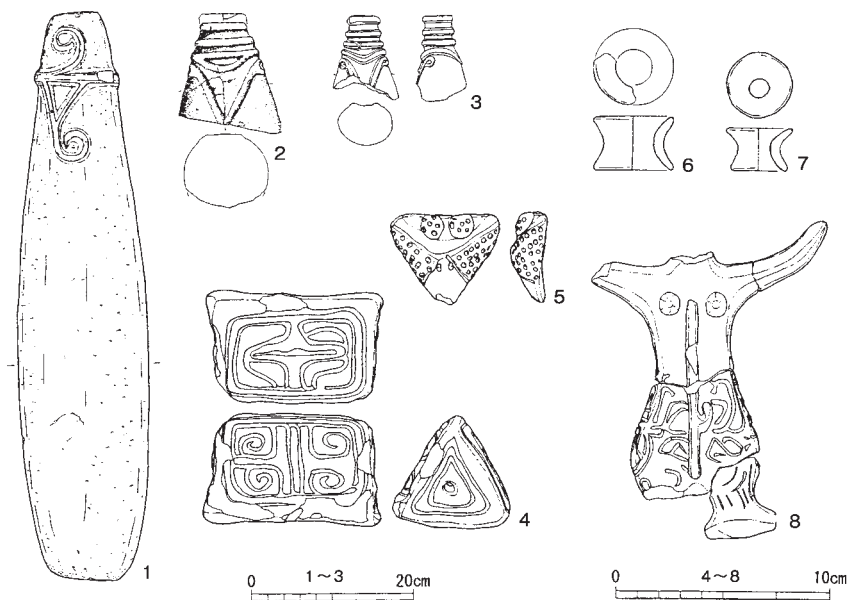
堂平遺跡・火焰型土器



道尻手遺跡・大木8a式土器



道尻手遺跡・天神山式土器



第3図 火炎土器文化の精神文化遺物

1. 芋川原遺跡 2. 羽黒遺跡 3. 中道遺跡 4～8. 道尻手遺跡

や三角形土製品、そして、三角壩形土製品、身体装飾の一部である滑車型耳飾（耳たぶに穿孔してはめ込むピアス）などが、重要な文化要素です。

また、竪穴住居の形態や配置が、火炎土器文化になると変化します。特に、床面中央部に石囲い炉が構築され、火種甕として埋設される土器の位置がほぼ住居の中心部に配されます。竪穴住居は、見晴らしの良い高台に複数で存在します。その配置は、規則性があり、竪穴住居の棟軸が放射状になり、その状態から環状集落と呼びます。環状集落には、床面の平面形が楕円形を呈する住居と長方形（四隅が隅丸状）を呈する住居の二種が併存する事例があります。集落の中心には広場が設けられ、長岡市馬高遺跡や岩野原遺跡では墓域が確認されています。貯蔵穴はフラスコ状土坑が構築されますが、その実態は不明です（岩野原遺跡では集落の片隅に群集します）。

これら環状集落は、越冬用の恒久的な集落と考えられ、春から秋に掛けては家族単位や年齢階層、そして性別単位を背景とした生業に伴う出造り村的な小規模活動施設が、活動領域に残された可能性が指摘されています。



火焰土器
(馬高遺跡出土、高さ30cm)

Ⅱ 火焰土器の発見

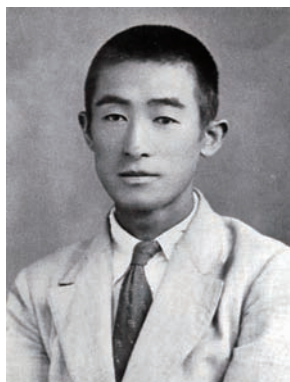
① 火焰土器と近藤家の人びと

関原の近藤家「火焰土器」は、長岡市関原町1丁目にある馬高遺跡で、昭和11年(1936)に地元関原町の考古学研究家・近藤篤三郎さんが発見した、と伝えられています。近藤家は農園のほか銀行や郵便局を経営する関原町の旧家であり、郷土の歴史や考古学に代々強い関心をもっていました。篤三郎さんは、父の勘治郎さんの影響を受けて、関原や長岡周辺の多くの遺跡を訪れて、縄文時代の土器や石器などを調べていたのです。近藤家が調査・研究した成果は、中央の学会誌や郷土誌に発表されています。



近藤勘治郎
(1882～1949年)

火焰土器の発見 馬高遺跡の発掘は、隣接する三十稲場遺跡とともに、昭和10年(1935)ころから始まり、篤三郎さんを中心に家族や地域の人びとの協力をえて進められました。とくに遺物が集中する地点をねらって発掘し、たくさんの遺物を収集していきました。昭和11年、寒さが身にしみる師走のころ、それも大晦日に篤三郎さんはひとり黙々と発掘をしていたといいます。篤三郎さんの遺物収集にける執念がうかがわれます。勘治郎さんの日記には、篤三郎さんが大形石棒と大形土偶を掘り出したことを記していますが、このとき火焰土器もいっしょに発見されたといわれています。



近藤篤三郎
(1907～1945年)

名まえの由来 広い屋敷を構えていた近藤家では、母屋のとなりの土蔵を「近藤考古館」と名づけて、集めた多くの遺物を陳列していました。馬高遺跡で発見された土器も、ここで復元の作業がおこなわれました。バラバラになっていた破片を元どおりするのは容易なことではありません。努力を重ねてようやく復元された土器は、口縁の大きな突起部分が真っ赤に燃えあがる炎を思わせることから、やがて「火焰土器」と呼ばれるようになりました。「火焰土器」は最初に発見されたこの1個の土器につけられた愛称（ニックネーム）で、それ以外のなかまは「火焰型土器」とか「火焰式土器」と呼ばれます。



縄文土器を復元する近藤篤三郎
(近藤考古館にて)



土偶
(馬高遺跡出土、高さ18cm)



石棒
(馬高遺跡出土、長さ42cm)

②「火焰土器」研究のあゆみ

全国で著名に「火焰土器」や馬高遺跡に情熱を注いだ近藤篤三郎さんの遺志は、戦後、長岡市立科学博物館の中村孝三郎さんに受け継がれました。中村さんは科学博物館の考古研究室の初代学芸員として、同館に寄贈された近藤家の膨大な資料を整理しました。特に馬高遺跡から出土した火焰土器の類については、慎重に復元して研究をおこないました。そして、「火焰土器」のかたちや文様の特徴が明らかにされ、学界にその名をとどろかせたのです。昭和39年(1964)の新潟国体では、聖火台に火焰土器のモデルが採用され、一般にも広く知られるようになりました。



土器を復元する中村孝三郎



新潟国体のポスター



長者ヶ原遺跡の火焰型土器

類例の発見 火焰土器のなかまは長岡周辺だけではなく、佐渡を含む県内各地で発見されています。古くは糸魚川市長者ヶ原遺跡や栃尾市（現長岡市）栃倉遺跡などの昭和30年代の学術調査で確認され、その後は中里村（現十日町市）森上遺跡、与板町（現長岡市）徳昌寺遺跡、長岡市^{さんか}山下遺跡、三島町（現長岡市）千

石原遺跡、津南町沖ノ原遺跡など、とくに信濃川流域の遺跡で発見が相つぎました。昭和50年代以降に大規模な発掘調査がおこなわれるようになると、長岡市岩野原遺跡、十日町市笹山遺跡、堀之内町（現魚沼市）清水上遺跡、津南町道尻手遺跡など、ひとつの遺跡から多数の火焰型土器が出土する例もでてきました。これらの成果により、火焰型土器に関する変遷や広がり具体的に明らかになりつつあります。



馬高遺跡の火焰型土器群（重要文化財）

遺跡と遺物の指定 火焰土器が最初に発見された馬高遺跡は、隣接する三十稲場遺跡とともに、昭和54年（1979）に国の史跡に指定されています。また、平成2年（1990）、馬高遺跡の「火焰土器」が学術的に高い価値を認められ、国の重要文化財に指定されました（その後、平成14年に「馬高遺跡出土品」として追加指定）。平成11年（1999）には、火焰型土器群を主とする十日町市笹山遺跡出土品が、国

宝の指定を受けたのです。新潟県では初めての国宝で、縄文土器としては国内初の指定であり、大きな話題となりました。さらに平成18年（2006）には、津南町堂平遺跡の火焰型土器・王冠型土器が重要文化財の指定を受けました。これらは火炎土器の文化を象徴する資料として、保存や活用がはかられています。



笹山遺跡の火焰型土器群（国宝）

Ⅲ 火焰土器の仲間とその特色

① 火焰型土器のかたち

様々な呼び名 前述のように、「火焰土器」とは昭和11年（1936）12月31日に近藤篤三郎氏によって現長岡市の馬高遺跡で発見されたと伝えられる、復元された一つの土器に付けられた愛称です。その形が燃え上がる焔に似ていることから、この名称が生まれました。

その後、鶏頭冠突起や鋸歯状突起など「火焰土器」と似た特徴をもつ土器が発見され、「火焰型土器」として区別されるようになりました。また、「馬高式土器」、「火炎土器様式」、「火焰系土器」、「火炎土器」という用語も使われています。

これらの用語は研究者によって使い分けられ、統一されずに使用されていますが、このテキストでは「火焰型土器」「王冠型土器」を総称して火炎土器とします。

3つのルール 火焰型土器の最大の特徴は、①口縁部に付く鶏頭冠突起、②鋸歯状突起、③原則として縄文を使用せず、隆帯と隆線文によって施された浮彫的な文様です。

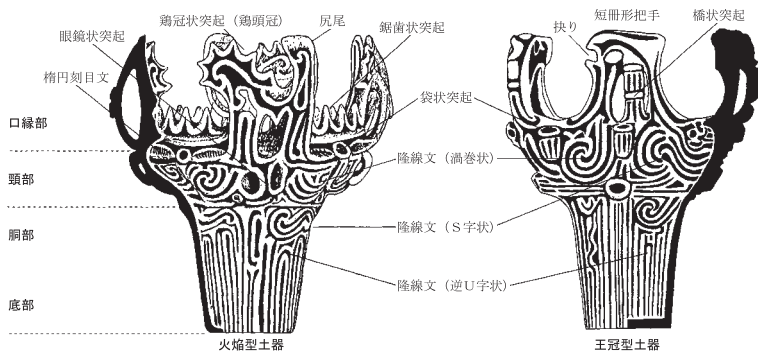
頸部と胴部は隆帯によって区画され、頸部と胴部上半部にはS字状渦巻文、胴部下半部には逆U字状文が描かれています。そのほか4つある鶏頭冠突起の間には袋状突起や楕円区画文、鶏頭冠突起の下にはトンボ眼鏡状突起が付けられています。

変遷 火焰型土器は、現在3～6段階の変遷が考えられています。

出現・成立期の火焰型土器は、頸部と胴部との境にくびれがあまり見られず、全体的にずんどうな器形をしています。また、鶏頭冠突起も背が低く、横長のものとなっています。文様にも、頸部に蕨手状文や連弧文などが見られるなど、不均一なものになっています。

これに対し、最盛期の火焰型土器は頸部が強くくびれ、胴部が細く引き締まった器形をしています。鶏頭冠突起は背が高く、大型のものになります。器形・文様とも非常に規格化されています。

器形 火焰型土器の器形には、深鉢形、浅鉢形、鉢形、その他がありますが、深鉢形が多数を占めています。鉢形はわずかで、出現期のものに見られることがあります。



第4図 火焰型・王冠型土器の部位と名称
 (長岡市馬高遺跡出土土器による〔中村1958〕に加筆)



鉢形土器
 山下遺跡 (長岡市)



鉢形土器
 野首遺跡 (十日町市)



深鉢形土器
 岩野原遺跡 (長岡市)



深鉢形土器
 岩野原遺跡 (長岡市)



深鉢形土器
 塔ヶ崎遺跡 (中頸城郡頸城村)

② 火焰型土器と王冠型土器

土器群に占める割合 一般的に火焰土器の時代といっても、火焰型土器だけがつくられていたわけではありません。土器の器面全体に縄文だけを転がしたような非装飾的な土器が約4割を占めています。火焰型土器やその仲間の王冠型土器のような装飾的な土器は、生活に用いる土器のおよそ1割程度であったと推定されています。

王冠型土器とは 王冠型土器は、その形が王のかぶる冠に似ていることからつけられた名称です。王冠型土器の基本的な形や文様は火焰型土器とほぼ共通しています。しかし、鶏頭冠突起の代わりに短冊状の突起がつくことや、火焰型土器が水平の口縁に鋸歯状の小突起がつくのに対し、波状の口縁となる点が異なります。

突起の違い 火焰型土器につく鶏頭冠突起は、鋸歯状の小突起が雄鶏のときかの形に似ていることからその名称がついていますが、尻尾をピンと立てて横を向く、生き物のようにも見えます。右に尻尾のある左向きのもの、左に尻尾のある右向きのもの2種類がありますが、4つ全てが必ず同じ方向を向いています。

また、王冠型土器の短冊形の突起の側縁には、えぐりがあって、鳥など生き物の口のように見えます。必ず左側になるという、たいへん興味深い特徴があります。



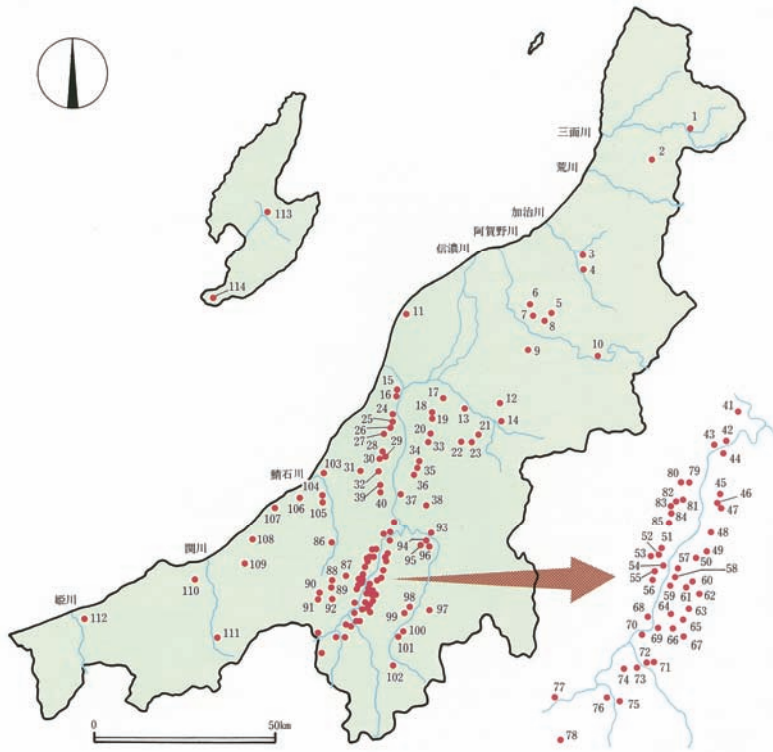
鉢形土器／王冠型土器
清水上遺跡（魚沼市）



王冠型土器
野首遺跡（十日町市）



王冠型土器
馬高遺跡（長岡市）



- | | | | |
|-------------------|-------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 前田 (岩輪郡朝日村) | 31. 新林 (長岡市) | 61. 城倉 (十日町市) | 91. 十文字 (東頸城郡松之山町) |
| 2. 大栗田 (村上市) | 32. 岩野原 (長岡市) | 62. 麻畑原 A (十日町市) | 92. 深田 (東頸城郡松之山町) |
| 3. 石田 (新発田市) | 33. 茨崎 (長岡市) | 63. 大池 A (十日町市) | 93. 清水水 (北魚沼郡堀之内町) |
| 4. 上津野 E (新発田市) | 34. 西片貝 (長岡市) | 64. 桃山 (十日町市) | 94. 正安寺 (北魚沼郡堀之内町) |
| 5. 村杉 (北蒲原郡神村) | 35. 中道 (長岡市) | 65. 南雲 (十日町市) | 95. 原尻平 (北魚沼郡堀之内町) |
| 6. 野中 (北蒲原郡水原町) | 36. 山下 (長岡市) | 66. 大井久保 (十日町市) | 96. 吉長沢 (北魚沼郡堀之内町) |
| 7. 横峰 B (北蒲原郡安田町) | 37. 外新田 (長岡市) | 67. 珠川 A (十日町市) | 97. 宮下原 (南魚沼郡六日町) |
| 8. ツベタ (北蒲原郡安田町) | 38. 赤木 (吉志郡山古志村) | 68. 仏子田 (中魚沼郡中里村) | 98. 飯綱山 (南魚沼郡六日町) |
| 9. 大蔵 (五泉市) | 39. 俣沢 (小千谷市) | 69. 川道 (中魚沼郡中里村) | 99. 上原 (南魚沼郡六日町) |
| 10. 原 (東蒲原郡津川町) | 40. 前野 (小千谷市) | 70. 向原 (中魚沼郡中里村) | 100. 万條寺林 (南魚沼郡湯沢町) |
| 11. 大沢 (西蒲原郡巻町) | 41. 徳右衛門山 (小千谷市) | 71. 森上 (中魚沼郡中里村) | 101. 原 (南魚沼郡湯沢町) |
| 12. 水源池 (加茂市) | 42. 下の間森 (小千谷市) | 72. 下向 (中魚沼郡中里村) | 102. 川久保 (南魚沼郡湯沢町) |
| 13. 原 (南蒲原郡下田村) | 43. 林中 (小千谷市) | 73. 芋川原 (中魚沼郡中里村) | 103. 岩野 (柏崎市) |
| 14. 五百川 (南蒲原郡下田村) | 44. 山谷 (小千谷市) | 74. 堂尻 (中魚沼郡津南町) | 104. 十三仏塚 (柏崎市) |
| 15. 松葉 (三島郡寺泊町) | 45. 池ノ端 (十日町市) | 75. 反里山 (中魚沼郡津南町) | 105. 辻の内 (柏崎市) |
| 16. 大平 (三島郡寺泊町) | 46. 行塚 (十日町市) | 76. 沖ノ原 (中魚沼郡津南町) | 106. 川内 (柏崎市) |
| 17. 吉野屋 (南蒲原郡栄町) | 47. 野首 (十日町市) | 77. 八反田 (中魚沼郡津南町) | 107. 梨の中平 (柏崎市) |
| 18. 黒坂 (見附市) | 48. 笹山 (十日町市) | 78. 釜坂 (中魚沼郡津南町) | 108. 長峰 (中頸城郡吉川町) |
| 19. 羽黒 (見附市) | 49. 新庄原 A (十日町市) | 79. 大原開墾地 (中魚沼郡川西町) | 109. 塔ヶ崎 (中頸城郡頸城村) |
| 20. 耳取 (見附市) | 50. 四ッ宮 (十日町市) | 80. 大原 (中魚沼郡川西町) | 110. 山屋敷 I (土越市) |
| 21. 石倉 (栃尾市) | 51. 西山 (十日町市) | 81. 新町新田 (中魚沼郡川西町) | 111. 大貝 (新井市) |
| 22. 枡倉 (栃尾市) | 52. 蟹沢 (十日町市) | 82. 菅池 (中魚沼郡川西町) | 112. 長者ヶ原 (赤魚川市) |
| 23. 入堀川 (栃尾市) | 53. 上ノ山 (十日町市) | 83. 中子北 (中魚沼郡川西町) | 113. 堂の貝塚 (佐渡郡金井町) |
| 24. 徳昌寺 (三島郡与板町) | 54. 幡上 (十日町市) | 84. 中子南 (中魚沼郡川西町) | 114. 長者ヶ原 (佐渡郡小水町) |
| 25. 下稲場 (三島郡与板町) | 55. 小坂 (十日町市) | 85. 久保山 (中魚沼郡川西町) | |
| 26. 上稲場 (三島郡与板町) | 56. カウカ平 A (十日町市) | 86. 上の山 (刈羽郡高柳町) | |
| 27. 千石原 (三島郡三島町) | 57. 土塚原 A (十日町市) | 87. 林中 (東頸城郡松代町) | |
| 28. 松堂 (長岡市) | 58. 川治土原 B (十日町市) | 88. 向原 I (東頸城郡松代町) | |
| 29. 南原 (長岡市) | 59. 牧鶴 (十日町市) | 89. 芳沢 (東頸城郡松代町) | |
| 30. 馬高 (長岡市) | 60. 伯父ヶ深 (十日町市) | 90. 萩安 (東頸城郡松之山町) | |

第5図 新潟県における火焰型・王冠型土器の出土遺跡

③ 火焰型土器の分布

火焰型土器の年代 火焰型土器は、縄文時代中期中葉に出現し、そして消滅した短命な土器です。東北地方南部の大木式土器の編年では、大木7b～8a式土器の時期にあたります。

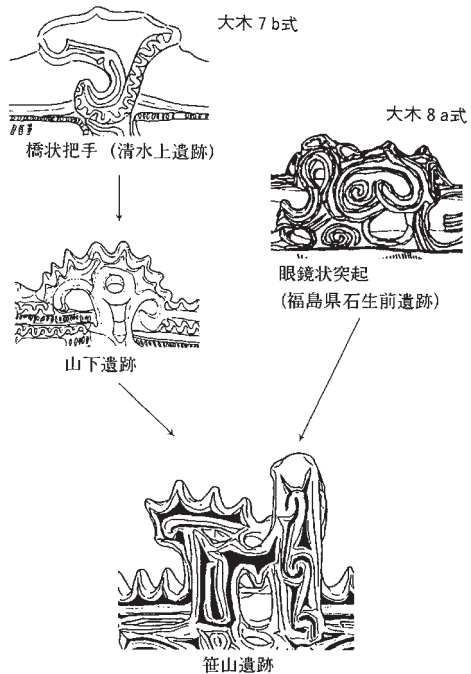
その出現に関しては、北陸地方の新保・新崎式土器、東北地方南部の大木式土器など周辺地域からの複雑な影響を受けたとされています。

鶏頭冠突起の起源 火焰型土器を特徴づけている鶏頭冠突起の発生については、中期前葉の大木7b式土器の時期に遡らせる考えと、中期中葉の大木8a式土器の時期とする二つの考えが示されています。前者は、その祖形を大木7b式土器の口縁部に付く橋状突起、後者は大木8a式土器の口縁部に付くS字文（眼鏡状突起）に求めています。

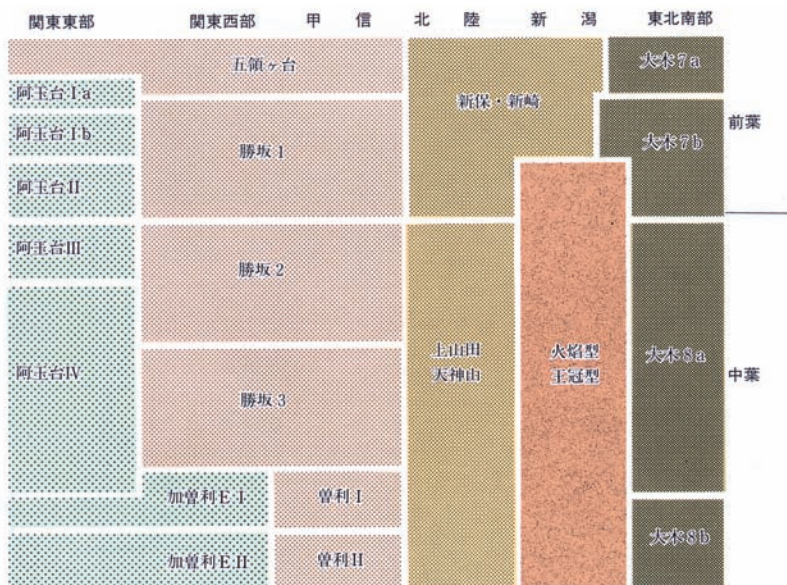
火焰型土器の分布 火焰型土器は、東日本の200を超える遺跡で確認されています。

典型的な火焰型土器は、新潟県内にほぼ分布が限られ、なかでも最盛期の火焰型土器は中魚沼郡津南町から長岡市にかけての信濃川上・中流域で集中的に出土しています。

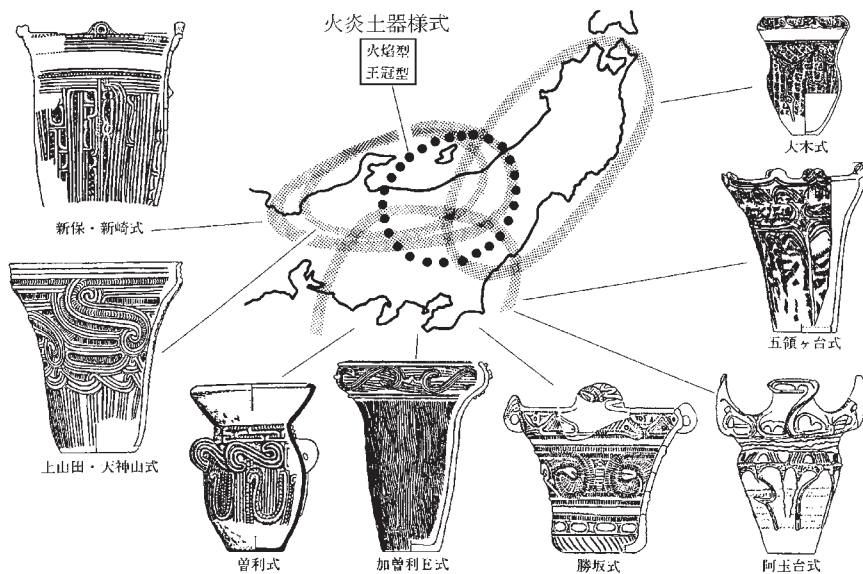
山形県・福島県・栃木県・群馬県・長野県・富山県など周辺地域にも見られますが、それらは新潟県内のものに比べ、器形・文様ともかなり変形しています。



第6図 鶏頭冠突起の変遷



第7図 東日本における中期前葉から中葉の土器編年（福島県立博物館編1991をもとに作成）



第8図 東日本における縄文時代中期の土器分布（小林1989をもとに作成）

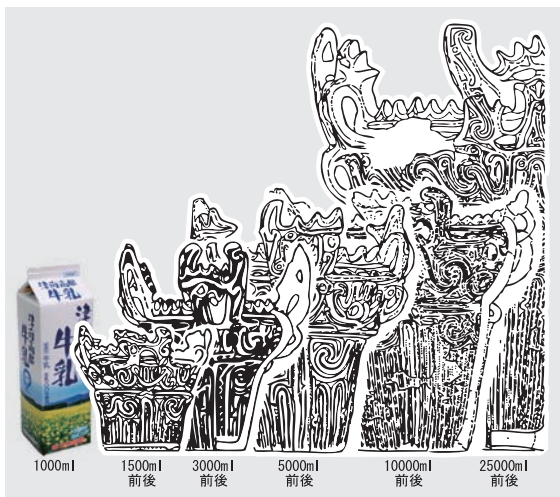
④ 火焰型土器の機能と用途

火焰型土器や王冠型土器は特異な形態を呈しますが、深鉢形土器に大別されます。通常、深鉢形土器は煮沸を目的として造られており、その機能が「煮沸＝煮る」という行為です。しかしながら、火焰土器文化の表象である火焰型土器や王冠型土器の保有量が土器総量の1割程度の実態から、日常的に使われていたというよりも、祭りのような「ハレの儀式」に伴い使用された煮沸用深鉢形土器と推定されます。



煮沸する土器

また、宮内信雄によれば火焰型土器の容量は、1,500・3,000・5,000・10,000ml前後に収まり、その最小が420.0ml、最大が24,683.7mlであり、平均値では約5,069.7mlです。このように火焰型土器は、用途に合わせて作り分けが行われていたことがわかります。火焰型土器の観察から、すべてに煮沸痕跡があることから、あるモノを煮ていたことは事実です。すなわち、煮たモノと配食対象との関係が想定され、大小異なる容量差は、多様な儀礼や儀礼の段階などが背景に造り分けされた可能性が指摘できます。



火焰型土器の高さと容量 (S=1/10)
(宮内2006: 改変)

それでは、火焰型土器で何を煮ていたのでしょうか。

近年、西田泰民によって、その煮沸対象物の実験が試みられ、一部が報告されています。それによれば、堅果類を中心に糖分を含むモノを煮沸していることが具体的に予想されています。

⑤ 火焰型土器のライフヒストリー

ここでは火炎土器の造形、焼成、使用、廃棄の過程を検討します。

材料となる粘土と混和材への研究は、ようやく端緒についたばかりです。その色調には白色系と赤色系があり、少なくとも黒褐色系はないようです。近年の研究によれば、鉄分の含有量によって色調に変化が生じることが判明しています。すなわち、白色系に比べて、赤色系の土器により多くの鉄分が含有していると理解されます。発見された火焰型土器を概観すると、長岡市近傍では白色系が多く、南魚沼市付近には赤色系が目立つことが寺崎裕助によって報告されています。この地域的な色調の違いは、地域の潜在的な地質構造と関連するものか、あるいは意図的に鉄分が含有する鉱物や滞水域に形成する橙色の酸化第二鉄を混入したのかなど、これからの検討課題です。



白焼きの火焰型土器
(岩野原遺跡)



赤焼きの王冠型土器
(道尻手遺跡)

また、東南アジアの土器作り民族事例に土器片や焼成粘土塊を砕いて混ぜ込むシャモットと呼ばれる混和材混入があります。これに類似する事例が、新潟県の中期中葉土器群で知られています。中期中葉という時期は、まさに火焰型土器が作られていた時期です。現段階では土器破碎片混入（シャモット）が確認された火炎土器がわずかにあります。

粘土紐の積み上げは、螺旋でなく環状積み上げです。器面の特徴的な文様は、隆線と隆帯で構成されます。隆帯は粘土紐を貼り付け調整していることが判明しています。しかし、隆線の断面がカマボコ状のものとウドン状のものがあり、カマボコ状は半截工具の押し引き、ウドン状は粘土紐を貼付したのち、半截工具の内面を当てて押し引くことで生まれると想定されます。

宮尾 亨によれば火焰型土器の特徴である鶏頭冠突起の製作方法には、「二本の粘土紐をそれぞれC字状に折り曲げつなぎ合わせる方法」と「一本の粘土紐の両端を互いに異なる方向に折り曲げてS字状を作りだす方法」の二種があるといいます。

見た目が同じ鶏頭冠状突起でも、その製作方法が違うということは、製作地や製作集団の違いに起因している可能性が指摘できる重要な観察視点です。

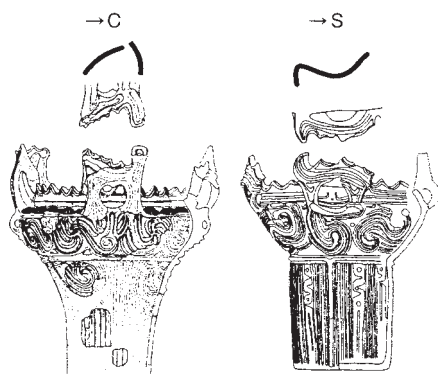
器面全体に流麗な渦卷文を描くには、土器を回転しながら製作するほうが望ましいのですが、縄文時代には回転ロクロはありません。しかし、土器をアンペラ状の網代や木の葉の上に置けば、手回しロクロにはなります。縄文土器の底部には、この網代跡や木の葉跡が残される事例がたくさんありますが、火炎土器はどうなのでしょう。皆無では有りませんが、大半は確認できません。これは丁寧に痕跡を消して、化粧土を貼り付けている可能性が想定されます。

焼成は、最終焼成時の燃焼材と土器との位置関係から黒斑形成が生じることが実験で知られています。しかし、火炎土器には、ほとんど黒斑が観察できないことから、焼成においても工夫がなされていたと推定されます。

使用で土器が破損した場合、土器片と土器本体に孔を穿ち、細縄で結び補修していたこと（穿孔結紐接合）が、多くの資料で知られています。では、火炎土器には補修孔があるのでしょうか。稀に、破片資料で確認できます。

また、本来の煮沸機能から離れ、二次的使用として埋設土器として利用している事例が、魚沼市清水上遺跡や十日町市笹山遺跡で確認されています。

廃棄に関しては、特別な扱いを窺うような事例はなく、通常の廃棄行為に伴い多くの土器や石器類、あるいは土偶片などあらゆる道具類の廃棄場所から共に重なり合いながら出土します。



鶏頭冠突起の種類



長岡市山下遺跡



【粘土紐 2本 C + C = S】



【粘土紐 2本 C + C = S】



【粘土紐 1本 S】



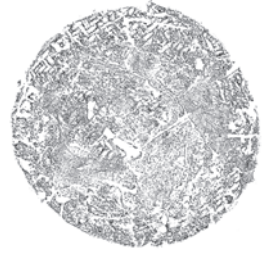
【粘土紐 1本 S】



十日町市幅上遺跡



王冠型土器の底部圧痕



(左の底部拓本)



十日町市森上遺跡



王冠型土器の補修孔



長者平遺跡補修孔

⑥ 火焰型土器の年代

考古学の年代とは 考古学の年代には、実際の年を単位であらわす「絶対年代」と、時間の相対的な新旧関係を示す「相対年代」があります。文字のある時代では、文書や記録から絶対年代である暦年代（実年代）を明らかにすることができます。一方、縄文時代など文字のない時代には、考古資料から絶対年代を決定することができないので、型式学的方法と層位学的方法に基づいて、資料の新旧関係を示す相対年代が用いられます。縄文時代で最も基準となる相対年代は、土器の型式編年です。これは土器がほとんどの時期や地域に広く存在し、その形態や文様に時間的な変化がよく反映されているからにほかなりません。

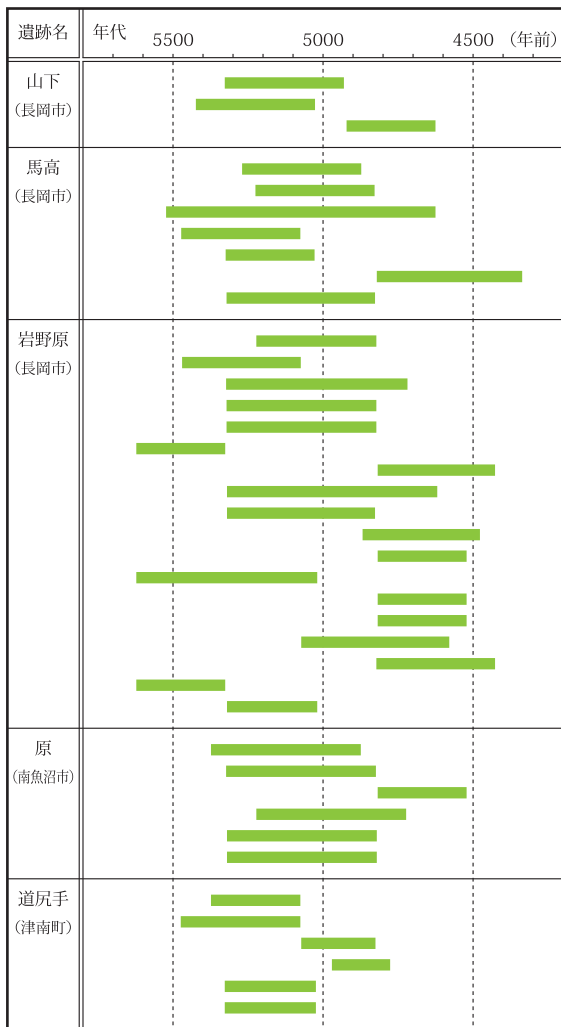
新しい年代測定法 近年では、放射性炭素（C14）法を主として、考古資料の理化学的な分析に基づいて年代（理化学年代）を測定することも盛んにおこなわれています。最近では放射性炭素法でも、微量の炭素で測定可能な加速器質量分析（AMS）法と呼ばれる新しい方法が開発され、さらにその値を暦年代に補正する手法（暦年較正）が登場して高精度化が進んでいます。補正された較正年代から縄文時代の始まりが極めて古くさかのぼるように思われがちですが、全体の枠組みが変わっただけで、特定の時代だけが古くなったわけではないのです。直接測られたC14測定年代と補正された較正年代をきちんと区別することが大切です。



王冠型土器の内面に付着したおごげ（岩野原遺跡）

火焰型土器の年代を測る 火炎土器様式は、縄文時代中期に位置づけられてきました。新潟県立歴史博物館の総合研究では、土器に付着した炭化物でAMS法による年代測定が進められています。その結果は、較正年代で約5,300年前から4,800年前までの、約500年間にほぼ収まっています。土器様式の変遷

では、大きく4段階に分けられているので、1段階あたり約120年と考えることができるでしょう。そのくらいの間隔で土器づくりの流行が移り変わっていたのでしょうか。



火炎土器様式の較正暦年代

(図中の各バーは較正プログラムの確立分析に基づいた土器の年代範囲を示しています。)



火炎第1様式 (山下遺跡)



火炎第2様式 (馬高遺跡)



火炎第3様式 (岩野原遺跡)



火炎第4様式 (馬高遺跡)

⑦ 火焰型土器に伴うその他の遺物

安山岩などの石材を選択した石棒や石皿のうち、意匠文様が彫り出される彫刻石棒や彫刻石皿と呼ばれるものがあります。

十日町市芋川原遺跡から出土した彫刻石棒は、男性性器を模倣デフォルメし、本体の亀頭部と下部に連結する三叉文を融合した蕨手文様が表現されています。この文様に類似する資料は、津南町堂尻遺跡からも出土しています。

彫刻石棒を含む石棒の大半は、破損して発見される事例が多く、芋川原遺跡のような完全な形で発見されることは稀です。

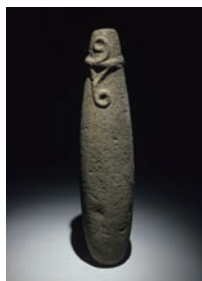
石棒に残される敲打痕・研磨痕・被熱痕・人為的破損痕・埋設痕などの使用痕跡から、石棒祭祀に伴う石棒のライフサイクルが想定されます。ここに示した魚沼市正安寺遺跡出土の鐔付き石棒の中央部のみ（主軸に対してほぼ直交する帯状）に被熱痕が認められるものです。その被熱痕は、下部では明瞭に分離できるものの、上部では区分線が不明瞭になることから、埋設に伴い被熱を受けた状況が推察される貴重な資料です。



屋敷の平遺跡

津南町屋敷の平遺跡から出土した彫刻石皿です。楕円形を呈する扁平な安山岩を素材とし、ちりとり状の機能面を有し、その縁部を広く持ち、そこに陰影による文様モチーフを描く資料です。

火焰型土器が作られた中期の中頃になると、彫刻石皿や石皿、それに伴う研磨面を持つくぼみ石が多量に出土するようになります。この石皿やくぼみ石の急増に伴い打製石斧も急増する傾向が信濃川流域で顕著に認められます。打製石斧と呼ぶ石器は、伐採用の斧でなく、地下茎や球根などを掘るための掘り具の先端に装着されていた可能性が指摘されています。打製石斧には、短冊形とバチ形



芋川原遺跡



正安寺遺跡

の基本形態があり、一部に身部中央部に抉りを持つ分銅形の祖形が現れます。

磨製石斧の大半は、蛇紋岩製です。これらの蛇紋岩は信濃川流域では産出せず、糸魚川市の姫川流域周辺で産出する硬度の高い石材です。信濃川流域における集落遺跡では、その生産工程資料が発見されることは無く、製品のみが出土することから、糸魚川市近傍から交易で搬入されたと推定されています。

火炎土器文化の石器群には、石槍は無く、刺突具は弓矢の石鏃のみです。その形態は、矢に装着する基部が抉る凹基型を呈します。在地の頁岩やチャートのほか、搬入された黒曜石が使用されます。

柄部を有する石匙や石錐は組成するものの、僅かな数量です。

また、漁労網用の錘と推定される石錘は、信濃川流域沿岸部に位置する中期の集落遺跡からは、ほとんど出土しません。前期や後期には、多量の出土が認められますが、火炎土器文化には稀です。

火炎土器文化圏の中でも、一部の集落で多量の出土する特異な石器があります。その形態から三脚石器と呼ばれます。厚手の素材剥片が選択



打製石斧



磨製石斧



石鏃・石匙・石錐



石錘

されます。その特徴は、形態が手裏剣状の三脚形を呈し、裏面は設置脚部以外を、抉る加工が施されることです。すなわち、脚部先端部裏面にのみ素材剥片の主剥離面を残存する特異な抉り調整が施されます。このような裏面抉り加工を施す三脚石器が典型的なものであり、裏面抉り加工を施さない扁平な三脚石器が散見されますが、時間的変遷に起因すると考えます。

この三脚石器は、十日町市城原遺跡や南魚沼市原遺跡など魚沼地方の一部集落遺跡で多量に出土する傾向があり、火炎土器文化圏外の山形県米沢盆地や秋田県内陸部で飛び地的に局地分布する特異な石器です。



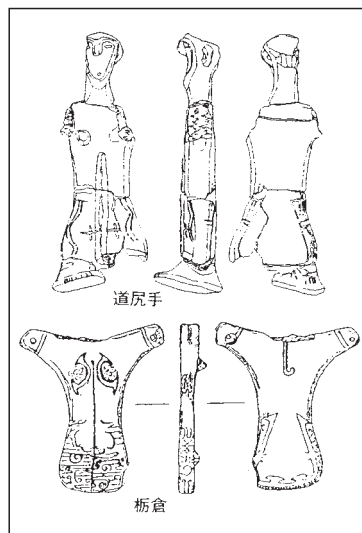
三脚石器



三角形土製品

江坂輝弥によって、三脚石器と関連付けられた土製品に三角形土製品があります。近年、この三角形土製品は、省略型土偶の一部として理解し、三角形土偶と呼称される場合もあります。大きな特徴は、乳房と想定される凸部表現（沈線表現も含む）と女性性器表現と思われる孔が穿たれるものです。一部には、男性性器と推測される垂れ下がる凸部表現も含まれます。

土偶には、脚部を表現する津南町道尻手遺跡や脚部を表現しない長岡市栃倉遺跡の資料に大別されます。道尻手遺跡例は脚部が歪んでることから自立しませんが、新潟



土偶

市大沢遺跡などにはしっかりと自立する事例があります。栃倉遺跡の事例は、道尻手遺跡と比較した場合、御札のように薄い特徴とバンザイのように伸ばした両腕の先端部に孔が穿かれることです。吊るす目的が想像されます。腕の先端部に孔を穿つ事例は見附市耳取遺跡などで散見されます。

また、土偶の胸部から腹部に掛けて下垂する線があり、正中線と呼びます。この正中線の大半は沈線で表現されますが、道尻手遺跡など魚沼地方では、隆起線で表現される違いが指摘されています。

火炎土器文化の重要な遺物に滑車形耳飾があります。この滑車形耳飾の発生の重要性について、藤森栄一が馬高遺跡を考察する際に触れています。滑車形耳飾は、貫通孔の有無（A・B）で大別され、その横断面形態から10種に細分されます。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
A										
B										

滑車形耳飾

1～3は滑車状、4は臼状、5～6は盃状、7～8は筒状、9～10は糸巻き状と形容されます。これら形態の異なる滑車形耳飾は、土器との共伴関係が明確で無いことから、現状では滑車状・臼状から盃状・筒状・糸巻き状へ変遷が予測されると推定されています。また、筒状や糸巻き状は基本的に貫通孔を穿つことが無いと判断されます。

三角埴土製品は、用途不明な三角柱を呈するもので、左右表面には意匠文様を描く資料が多く、裏面に女性性器と推定される凹文を表現した資料が魚沼市柿ノ木遺跡から出土しています。



柿ノ木遺跡

⑧ 火焰土器ギネス一点数と大きさ一

火焰土器のなかまが多数出土している遺跡は？ 破片を含む出土点数では比較することが難しいので、ここでは火焰型・王冠型の類で全体を復元できた点数で比べてみましょう。まず、一つの遺跡で最も復元点数が多いのは、十日町市の野首遺跡でしょう。その数は40個に及びます。次いで多いのが十日町市笹山遺跡、長岡市岩野原遺跡、津南町道尻手遺跡などで20個近い復元品があります。いずれも信濃川流域の拠点的な集落跡です。信濃川流域以外では、村上市高平遺跡で多数の火焰型・王冠型土器が出土しています。



火焰型・最大（道尻手遺跡）



王冠型・最大（道尻手遺跡）



火焰型・最小（石倉遺跡）



王冠型・最小（岩野原遺跡）

最も大きい火焰土器のなかまは？ 何ととっても、ナンバーワンは津南町道尻手遺跡の火焰型土器でしょう。高さが61cmになります。次いで大きいのが十日町市笹山遺跡の推定58cmです。底部がないので正確な高さは不明ですが、径がかなり大きく道尻手遺跡に匹敵するかもしれません。王冠型土器でも、道尻手遺跡の52cmが最大です。十日町市や津南町などの魚沼地方と、長岡市周辺の土器のサイズを比べると、全般的に魚沼地方の方が大きいことがわかっています。これは長野県方面や関東地方などの影響によるものでしょう。なお、出土地は不明ですが、米国クリーブランド美術館所蔵の火焰型土器は69cmと紹介されています。これが最大かも！?

最も小さい火焰土器のなかまは？ 一方、小さいものでは長岡市（旧栃尾市）石倉遺跡で発見された火焰型土器が高さ15.5cmです。また、村上市高平遺跡には15.7cmの火焰型が認められます。津南町道尻手遺跡の火焰型土器はさ

らに小形の可能性もありますが、口縁部が欠けているため明確ではありません。王冠型土器では、長岡市岩野原遺跡出土のもので高さ13.4cm。掌にのるサイズです。魚沼市清水上遺跡には14cmの王冠型があります。

なお、上記は平成20年3月現在のランキングです。遺跡によって発掘面積や出土品の整理状況等が異なるので、今後の調査や研究で変わる可能性があります。



十日町市野首遺跡の復元された火焰型土器群

IV 火焰土器散歩

① 津南町の火焰土器散歩



甲武信岳を源とする千曲川が市河谷を北流して、信越国境で信濃川と改名します。そこに開けた町が津南町です。津南町では、南から志久見川、中津川、清津川が信濃川に流れ込み、その河川沿いに30万年の悠久な時間をかけて日本一の河岸段丘が形成されています。

<沖ノ原遺跡> 国指定史跡

沖ノ原遺跡は、昭和45～47年に掛けて慶応大学によって範囲確認調査が実施され環状集落が発見されました。その貴重な遺跡を町では約2.4万㎡を町有化して恒久的に保存しました。遺跡から出土した遺物群は、新潟県指定文化財に認定されています。



沖ノ原遺跡

<道尻手遺跡>

道尻手遺跡は、平成8年に国営圃場整備事業に伴い集落跡の1/4を発掘調査しました。残りの部分は、水田として保存されています。調査で広場を囲み、竪穴住居跡が環状に配置されていたことが記録されました。出土遺物は、火焰型土器群を中心に、土偶、三角形土製品などや、多量の石器群が出土しました。



道尻手遺跡

<堂平遺跡>

堂平遺跡は沖ノ原遺跡同様に標高約470mの高位段丘に位置し、妙高山や米山が遠望できます。調査は国営圃場整備事業に伴い平成8年に実施されました。この遺跡から国重要文化財（国保有文化財）の火焰型土器と王冠型土器が出土しました。



堂平遺跡

<津南町歴史民俗資料館> 025-765-2882



津南町歴史民俗資料館

津南町歴史民俗資料館は、考古資料と民俗資料を収蔵展示している施設です。また、敷地が旧桑原家の屋敷地であり、現状のまま茅葺民家と倉が保存されています。収蔵資料には、国重要文化財である秋山郷の生活用具と堂平遺跡の火焰型土器群があります。また、県指定文化財の沖ノ原遺跡遺物群があります。

<津南町農と縄文の体験実習館 なじよもん> 025-765-5511



なじよもん

詳細は「なじよもん」で検索!!

なじよもん

検索

「なじよもん」は、津南町に残されたすばらしい歴史民俗を後世に伝承する目的で建設された体験実習館です。年間、土日および夏休みを中心に体験実習『がむしゃら塾』が開講しています。遺跡発掘や土器作り、アングイン編みやランプシェードなどなど、多彩な実習アイテムの展開があり、全国から注目されています。



遺跡発掘



土器作り



火おこし

② 十日町市の火焰土器散歩

〈十日町の遺跡〉

十日町市は、なだらかな美しい山なみにかこまれ、悠々と流れてやまない信濃川とその兩岸に広がる河岸段丘をもつ十日町盆地の中心に位置しています。平成17年4月に5市町村が合併して、現在の十日町市が誕生しました。

今から5,500年ほど前の縄文時代中期中頃、ここ信濃川中流域には豊かな縄文文化が花開いていました。多くの遺跡から出土する火焰型土器はその象徴です。主要な出土品が新潟県初の国宝に指定された笹山遺跡をはじめ、寿久保遺跡・野首遺跡・城倉遺跡・南雲遺跡・森上遺跡・上ノ山開墾地遺跡・幅上遺跡などの大規模な集落跡があり、多数の火焰型土器や王冠型土器、多種多様な石器類・土製品類などが出土しています。

これら大規模な集落跡が、信濃川に沿って2～3kmの間隔をおいて立地している様子は、まさに「火焰型土器のクニ」の景観そのものであり、ムラとムラの関係を考える上でとても興味深いことです。

国宝出土地の笹山遺跡では、地元住民による手づくりイベント「笹山じょうもん市」が毎年開催され、今後、火焰の都整備事業による遺跡公園整備が進められる予定です。

〈十日町市博物館〉

十日町市博物館は、十日町地方の特性を生かし、「雪と織物と信濃川」をテーマとして昭和54年4月に開館しました。市民のための博物館として、地域に密着した活動を展開しています。また、魚沼地方の資料調査や保存と研究に努め、郷土文化を発信しています。

最新の情報と技術を使った解りやすい展示、教育普及活動、市民参加の活発な博物館友の会活動などが評価され、文部科学省推薦の全国の特徴ある博物館に選ばれています。

展示室には、国宝「笹山遺跡出土品」(928点)、重要文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」(2,098点)、重要文化財「十日町の積雪期用具」(3,868点)が収蔵展示され、実物をふんだんに使った説得力のある展示に思わず圧倒されます。郷土植物園や遺跡ひろばなどの屋外展示施設も整備されています。



笹山遺跡出土の土器群
(国宝)



笹山じょうもん市
縄文コスチュームショー



笹山じょうもん市
笹山縄文太鼓の演奏



竪穴住居の内部復元
(十日町市博物館)

③ 長岡市の火焰土器散歩

長岡の縄文遺跡 信濃川を挟んで広がる東山・西山の丘陵沿いに多数の縄文時代の遺跡が知られています。火焰土器がつけられたころ（約5,000年前）は、全国でも有数の活気あふれる地域でした。火焰土器文化の中心地の一つである長岡周辺には、馬高遺跡のほか、岩野原遺跡・

徳昌寺遺跡・山下遺跡・中道遺跡・栃倉遺跡などの大規模な集落跡があり、多数の火焰型土器や王冠型土器、多種多様な石器類、信仰に関わる土偶や石棒などが出土しています。

現在、火焰土器発祥の地である馬高・三十稻場遺跡は、縄文時代のたたずまいが感じられる史跡公園を目指して整備事業が進められています。

長岡市立科学博物館 地学・植物・昆虫・動物・歴史・民俗・考古の各分野に関わる資料を展示しています。考古部門の資料には、火焰土器の発見者である近藤勘治郎・篤三郎父子の収集遺物や、当館が開館以来発掘調査した膨大な点数に上る出土品があります。考古展示では、旧石器時代の遺跡から発見された石器群や、国指定重要文化財「馬高遺跡出土品」「小瀬ヶ沢洞窟出土品」「室谷洞窟出土品」をはじめとする縄文時代の土器や石器類が特に充実しています。

なお、「馬高遺跡出土品」など、長岡市内



空から見た馬高遺跡



徳昌寺遺跡の火焰型土器



栃倉遺跡の火焰型土器

の火焰型土器に関わる資料については、平成21年秋、馬高・三十稲場遺跡に開館予定のガイダンス施設（仮称）で総合的に展示することになっています。

新潟県立歴史博物館 馬高・三十稲場遺跡の近くには、新潟県立歴史博物館（関原町1丁目）があり、新潟県のあゆみ、新潟の特産である米や雪などの展示とともに、縄文文化を中心とした展示で構成しています。なかでも四季を通じて縄文人たちのくらしぶりを再現した大形のジオラマ「縄文人の世界」は圧巻で、縄文時代の雰囲気伝わってきます。「縄文文化を探る」のコーナーでは、さまざまなテーマを掘り下げて詳しく解説しています。また、県内の主要な火焰型・王冠型土器を見学することができます。



新潟県立歴史博物館の展示風景



馬高・三十稲場遺跡ガイダンス施設の展示イメージ

津南観光

苗場山麓に深く刻まれた中津川渓谷
日本のグランドキャニオンと形容される深い渓谷
幾段にも連なる段丘、そして、輝く湧水とまばゆい光



中津川渓谷の流れ

津南町は信濃川床の117m地点から直線距離で約25km、そこに2千m級の苗場山山頂が位置します。

この雄大な自然環境は、標高によって、気象や地質に違いが認められ、それを背景とした植物群落と動物や昆虫、魚類や鳥類などが複雑な生態環境を形成しています。まさに、縄文の森が広がるアクティブパーク！

深く刻む中津川渓谷は、古くから秘境と知られており、江戸時代には鈴木牧之が、幕末には佐久間象山が訪れ、紀行文を残しています。特に、牧之が書き残した『秋山記行』は、氏が鬼籍に入った後に江戸で刊行された秘境探訪記であり、民俗記録報告書です。魅力的な四季が展開する秋山郷にレッツゴウー！



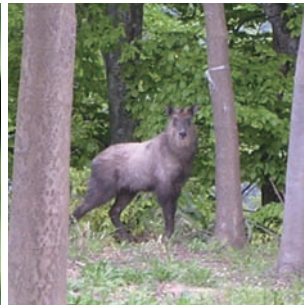
初冬の苗場山



オゼイトンボ



ミヤマシジミ



ニホンカモシカ

— 落葉広葉樹の森で、自然と共に共生した縄文文化 —

その縄文哲学を由緒とした安全な食糧生産基地 津 南
 自然の恵み それは豊かな水とまばゆい光 そして豊穡の黒土

津南町の国道117号線沿線に農家売店が点在し、取立ての野菜などが安く販売されています。とにかく、安くて美味しい！ その一言

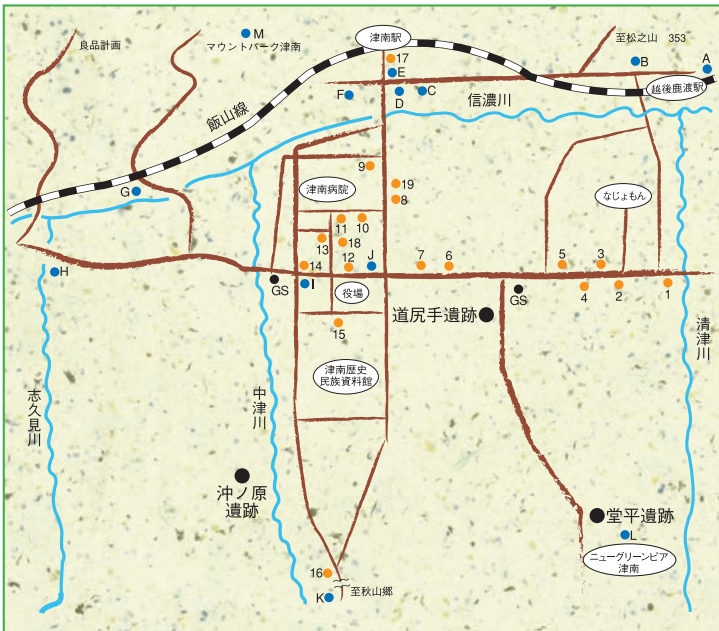


<津南観光物産館>



ここにくれば津南ブランドが何でも買える。美味しいお米、野菜、そして酒。珍しい木工品や懐かしい民芸品。笑顔があふれる！疲労を癒す温泉も備えてあり、うまい食堂も大入り満員ですよ。

<国道117号沿線 宿泊：食べ歩き マップ>



食 事 処

- 1 かどまん 卯ノ木店
- 2 じよんのき
- 3 麦秋庵
- 4 かどまん 十二ノ木店
- 5 十兵衛
- 6 ぼばい
- 7 とみざわ
- 8 はまや食堂
- 9 ムルソー
- 10 立花
- 11 ぐるめかん 大勝
- 12 東京飯店
- 13 たからや食堂
- 14 青龍ラーメン
- 15 みまさ食堂
- 16 味処 大平
- 17 福原食堂
- 18 喰い処 味郷
- 19 魚菜

お 泊 り 処

- A しかわたり館
- B 深泉荘
- C 伴茶夢
- D 深雪会館
- E 風巻旅館
- F 雪国
- G しなの荘
- H 宝山荘
- I 綿屋旅館
- J 伊勢屋旅館
- K 街逆巻温泉 川津屋
- L ニューグリーンピア津南
- M マウントパーク津南



十日町市

移りゆく季節に
想いをのせて...

美人林(松之山)

松口の丘陵に樹齢約80年ほどのブナの木が一面に生い茂っています。あまりにもブナの立ち姿が美しいことから「美人林」と呼ばれるようになったといわれています…。

(外気より気温が2℃低いと言われております)

【問合せ】十日町市観光協会松之山支部
TEL:025-596-3011

十日町市博物館(十日町)



国宝 笹山遺跡出土深鉢形土器

今から4,500年ほど前の縄文時代中期、ここ信濃川中流域は豊かな文化が花開いていました。多くの遺跡から出土する火焔型土器はその象徴です。笹山遺跡は多くの住居址や出土物から、中心地の一つと考えられています。整理された資料の一部は、平成11年、国宝に指定されました。



国宝の火焔型土器をはじめとし、雪国十日町市の歴史をご覧になることができます。「雪と織物と信濃川」に関する資料や、国宝の火焔型土器や積雪期用具・越後縮の紡織用具及び関連資料などの重要文化財を収蔵展示しております。

【問合せ】十日町市博物館
TEL:025-757-5531

妻有焼

「妻有焼」とは

新潟県の越後妻有地域には、縄文時代中期の約4,000年前に作られた、国宝にも指定されている火焔型土器が出土する。縄文時代以来途絶えてしまったやまものを感じ、復興として作りだすきっかけが加わっている。おねはし(妻有焼)と交付された。奥多摩の陶芸家・市田明氏は、越後妻有の土や石を採り、地粉、武蔵、国産赤土、二酸化鉄、酸化銅、酸化亜鉛などを加え、さまざまな技法を「妻有焼」として表現している。



大地の芸術祭で一躍有名になった「うぶすなの家」(十日町市・願入)では、食事やお茶に妻有焼の器を使っています。地元の水の温もりが伝わってくるような素朴な妻有焼を愛用しています。

【問合せ】十日町市役所産業振興課
TEL:025-757-3139

まつだい雪国農耕 文化村センター(松代)

ギャラリー、シアター、レストラン、ショップなどを備えた総合文化施設です。国内外の建築家とアーティストによって作られた目を見張る非日常的空間には楽しい仕掛けが施されています。

【問合せ】まつだい農耕村文化センター

TEL:025-595-6180



光の館(川西)



「光の館 - House of Light」は光のアーティスト、ジェームズ・タレルの作品です。

この実験的な作品は、彼の作品世界を滞在生活の中で体験いただける、世界にも例を見ないものであり、瞑想のためのゲストハウスとして構想されました。

【問合せ】十日町市観光協会川西支部

TEL:025-768-4951

松之山温泉(松之山)

日本有数のホウ酸含有量を誇り、塩分の強い松之山温泉。

雪深い新潟と長野の県境にたたずむ静かな温泉地。その薬効は草津、有馬とともに日本三大薬湯に数えられています。

【問合せ】十日町市観光協会松之山支部

TEL:025-596-3011



清津峡(中里)

清津峡の大渓谷を安全に、安心して観賞していただける「清津峡渓谷トンネル」。4ヶ所の見晴所からは雄大で荘厳な渓谷美を堪能できます。トンネル内ではパネル



やビデオで清津峡の四季や自然、成り立ちを紹介するコーナーもあります。

(全長750m:往復所要時間約40~60分)

【問合せ】十日町市観光協会中里支部

TEL:025-763-3168

棚田(松代・松之山)

山の斜面に沿い階段状に広がる棚田。米を作り、小さなダムとして山を支え、小さな生き物達の住み処となりました。

近年では、雪解けの時期や水張りの時期にカメラを持って撮影に来る観光客も多く見られます。

【問合せ】十日町市観光協会松代支部

TEL:025-597-3000



越後長岡 てんこもり

長岡ゆかりの智将～与板城主 直江兼続～



複製品 金小札浅葱糸威二枚胴具足
原資料・上杉神社(米沢市)所蔵

兼続お船ミュージアム(長岡市与板歴史民俗資料館)

2009年大河ドラマ「天地人」の主人公、直江兼続ゆかりの地——与板。

ドラマの放送に合わせて内容を一新し、リニューアルオープン！

兼続所用の「愛の甲冑(複製品)」や与板ならではの「兼続と与板」、「天地人お船の方」などをテーマにした展示です。

【問合せ】兼続お船ミュージアム(長岡市与板歴史民俗資料館) Tel. 0258-72-2021



地域交流センター まちの駅「よいた」

観光客の立ち寄り処、地域住民の憩いの場として、与板のまちなかにオープン！大河ドラマ「天地人」にちなんだグッズや与板特産品なども販売。与板のまちを案内するガイド会への申込受付も行っています。

【問合せ】地域交流センター まちの駅「よいた」
Tel. 0258-72-4161

うんメモん memo



与板名物 大判屋の大判焼

地元メディアにも紹介された大繁盛のお店。
見てのとおり、とにかくでかいっ！！
はかってみたら厚さが4.5cmもありました。
通常の1.5倍はありそう。食べ応え十分。

ちょっと足を延ばして日本海～寺泊～

魚の市場通り

「魚のアメ横」とまでいわれるほど大賑わいの寺泊・魚の市場通り。
新鮮な海の幸と旬の味がいっぱいです。イキの良さが売り物の魚の市場通りは、さすが
港町とうなずけるまちなみです。



売り子の威勢のいい掛け声と、港町特有の波音を聞きながら、「イカや魚の「浜焼き」」を食べてみませんか？ きっと優しい日本海を満喫できます。

【問合せ】寺泊観光協会
TEL 0258-75-3363



うんメモん memo



寺泊名物 番屋汁

浜の番小屋で漁師が毎日食べていたもので、旬の野菜と獲れたての魚などをブツ切りにした味噌仕立ての汁。浜の漁師の生活の知恵とダイナミックな男の味が詰まった「浜の味」をご賞味ください！

もっと 火焰型土器を調べたい方は、
下記の主要文献をお読みください！



- 斎藤秀平 1937 『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告』 第七輯 新潟縣
水尾比呂志 1093 「中期裝飾付土器」『國華』 885号
中村孝三郎 1958 『馬高No.1 (近藤編)』 長岡市立科学博物館
中村孝三郎ほか 1973 『千石原』 長岡市立科学博物館
中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館
中村孝三郎 1970 『古代の遺跡—火炎土器から蒼い足跡まで—』 講談社
金子拓男 1977 「火焰型土器考」『新潟県立図書館報 にかがた』 5
小林達雄 1977 「6. 土器の変遷」『日本原始美術体系 1 縄文土器』 講談社
小林達雄 1978 『日本の美術 縄文土器』 No.145 至文堂
新潟県教育委員会編 1979 『新潟県埋蔵文化財図録集 I 火焰型土器』
小林達雄 1981 「越後新潟火炎土器のクニ」『月刊文化財』 No.215
金子拓男 1981 「火焰土器」『縄文文化の研究 縄文土器II』 第4巻 雄山閣
佐藤雅一ほか 1985 「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相(上)」『三条考古学研究会機
関誌』 第3号 三条考古学研究会
高橋 保 1985 「新潟県 馬高遺跡《火焰型土器をめぐって》」『探訪 縄文の遺跡』 東日本編 有
斐閣
金子拓男 1986 「二 火焰土器の誕生とその展開」『新潟県史 通史編1 原始・古代』
小葉一夫ほか 1987 「馬高系土器群の系譜 -土器型式の伝播と情報の流れ-」『東京都埋蔵文化財
センター 研究論集』 V 東京都埋蔵文化財センター
品田高志 1987 「『王冠型土器』考」『柏崎市立博物館 館報』 No.2
島田靖久 1987 「信濃川上流域の火焰型土器(1)」『市史リポートとおかまち』 第1集 十日町市史編
さん委員会
阿部恭平ほか 1988 「信濃川上流域の火焰型土器(二)」『市史リポート とおかまち』 第二集
小林達雄ほか 1988 「火炎土器様式」『縄文土器大観3 中期II』 小学館
品田高志 1988 「『王冠型土器』をめぐる諸問題について」『新潟考古学談話会会報』 第1号
寺崎祐助 1989 「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」『新潟考古学談話会会報』
火炎土器研究会編 1990 『火炎土器様式文化圏の成立と展開』 福島県柳津町教育委員会
廣野耕造 1990 「馬高式土器の再検討」『新潟史学』 第25号 新潟史学会
小田由美子 1991 「火焰土器様式ノート」『新潟考古学談話会会報』 第7号
寺崎裕助 1991 「火炎土器様式について」『新潟考古学談話会会報』 第8号
中野 純 1995 「火焰土器の変遷」『柏崎市立博物館 館報』 No.10
十日町市博物館編 1996 『火焰土器研究の新視点』 十日町市博物館
十日町市博物館編 1996 『縄文の美 -火炎土器の系譜-』 十日町市博物館
小林達雄 1996 「火炎土器の形と心」『大田区立郷土博物館紀要』 第6号
寺崎裕助 1996 「越後と火炎土器」『大田区立郷土博物館紀要』 第6号
佐藤雅一 1998 「新潟県の中期中葉から後葉の様相」『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の様
相』 縄文セミナーの会

- 寺崎裕助 1999 「中部地方 中期（馬高式）」『縄文時代 2分冊 土器型式編年研究（2）』10号
- 小島俊彰 2000 「粘土紐扱いの手馴たち - 火焰型土器の作り手-」『新潟県立歴史博物館開館特別展 ジョウモネスク・ジャパン』新潟県立歴史博物館
- 十日町市博物館編 2000 『火焰型土器をめぐる諸問題』十日町市博物館
- 長岡市立科学博物館編 2001 『長岡市立科学博物館開館50周年記念特別展図録 重要文化財考古資料展 - 火焰土器と小瀬が沢・室谷洞窟出土品-』長岡市立科学博物館
- 宮尾 亨 2002 「火焰土器の文様素」『新潟県歴史博物館研究紀要』第3号 新潟県立歴史博物館
- 小熊博史 2003 「岩野原遺跡出土の火焰型土器群（1）- 火焰型土器群の研究 I -」『長岡市立科学博物館研究報告』38号 長岡市立科学博物館
- 新潟県歴史博物館編 2004 『火炎土器の研究』同成社
- 佐藤雅一ほか 2005 「IV-1 魚沼地方における道尻手遺跡出土土器の編年学的位置付け」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
- 佐藤雅一 2005 「新潟県津南郷を中心とする縄文土器の変遷」『よみがえる 被災 火焰型土器』クバプロ
- 寺崎裕助 2005 「火焰土器・火焰型土器の文様パターン」『地域と文化の考古学 I』六一書房
- 関 雅之 2006 「「火焰土器」の名称考」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 宮内信雄 2006 「火炎土器の大きさ」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 小林達雄編 2006 『火焰土器の時代 - その文化を探る -』津南町教育委員会

★この主要文献目録は、平成20年3月段階のものです。

本テキストを作成するにあたり、下記の皆様からご協力とご指導を頂きました。
心から感謝申し上げます。

小川忠博・吉田邦夫・寺崎裕助・西田泰民・中沢英正
宮尾 亨・榎本剛治・宮内信雄・高木公輔・山際哲章
糸魚川市教育委員会・魚沼市教育委員会・新潟大学旭町学術資料展示館

信濃川火焰街道 火焰土器散



山下遺跡

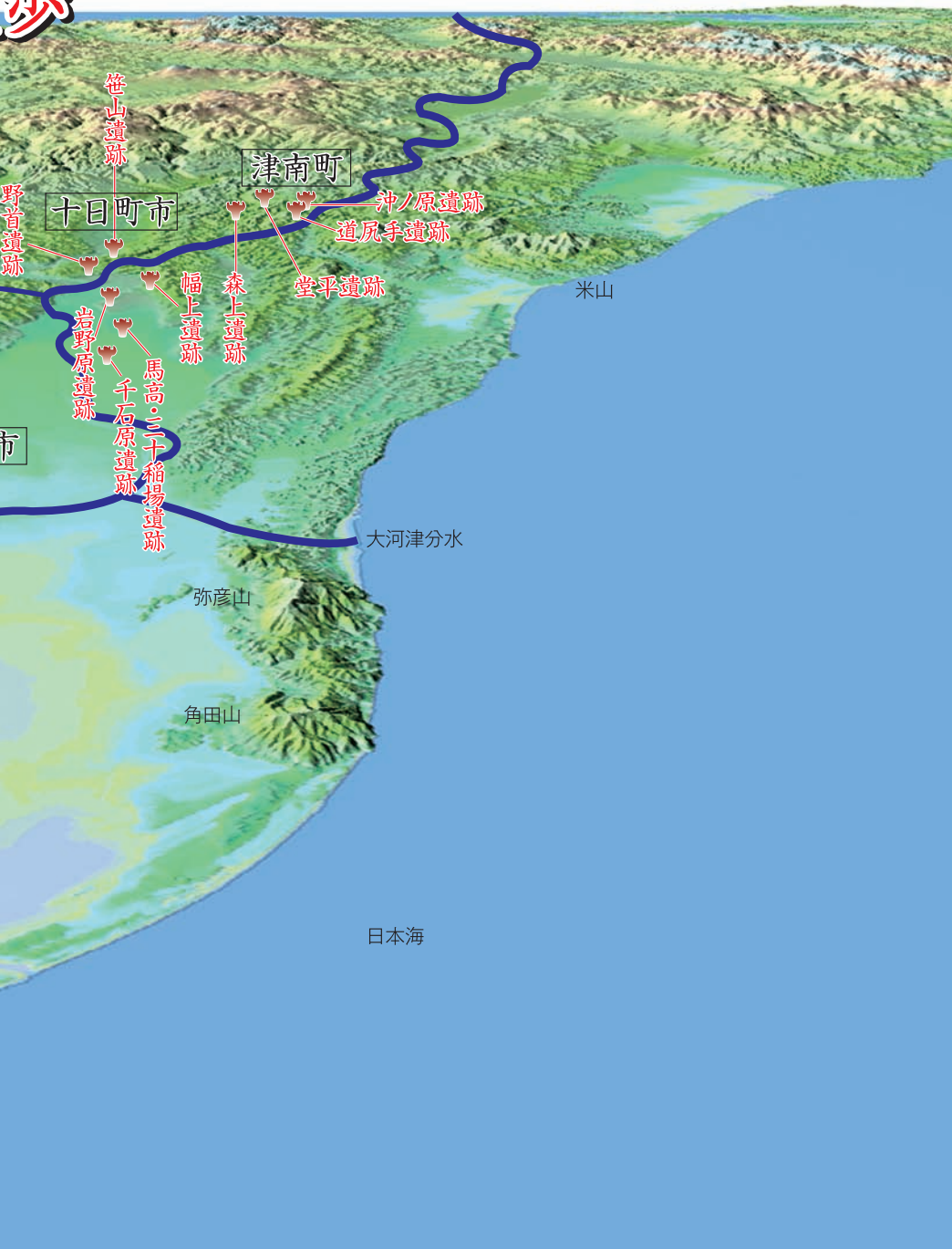
枋倉遺跡

長岡市

信濃川

新潟市

歩





津南町：なじよん縄文ムラ

〈縄文楽検定テキスト〉
縄文文化と火焰土器

- 監 修：小 林 達 雄
- 執 筆：佐藤雅一・石原正敏・小熊博史
- 編集・発行：信濃川火焰街道連携協議会
- 発 行 日：平成21年3月31日